



最高の見つけもの

ベンの両親が毎年海へ行った。南へ行ったり、北へ行ったり、時には船で、時には飛行機で行きましたが、いつも海に行った。ベンは気晴らしに一度は火山を見に行くか、エレベーターで高いビルの100階へ行ってみたかった。エスキモー、北極熊や本物のジャングルどころか、インディアンも見ることがなかった。

また今度ね」とお父さんは言った。しかし、次の夏休みにもまた海に行った。

まあ、いいや。じゃ、海の研究者になろう」とベンは思った。そして、ベンはどの海に行っても、マーメイドの瓶いっばいの砂、クッキー缶いっばいの貝殻、ヤドカリの家といっばいの見つけものを持って帰った。両親は叱りましたが、ベンが石と海綿を靴につめると引きずって行った。

ベンの部屋の棚はちゃんとラベルが貼られたガラスいっばいの砂、お皿いっばいの貝殻と箱いっばいのヤドカリの家で詰まってきた。

石が水が入った大きな瓶に入れた。というのは、濡れているほうがきれいに見えるからだ。とても特別な見つけものは宝箱みたいに塗った靴箱に閉まっておいた。その中に、カニのはさみ、ウニ殻のひとかけら、石になったヤドカリの家とよく分からない写真が入っていた。ちゃんと見たら、たくさん小さなヤドカリの家が蒼い水の中で岩にくっついてるのが分かった

ベンが宝を見せた人は皆この写真何と聞いた。

そして、「これは思い出なんだ」とベンは答えた。

今まで見つけた物の中でこれが一番だよ」。





これはサルディニアの浜辺で見つけた。そこは他に誰も行かないほど岩の多い所だった。巨大な岩が巨人がばら撒いたように粗い砂の中にあった。海の至るところからも石が突き出ていた。ベンが一つの石からもう一つの石へ飛び移った時に、岩の水面からすぐ下のところ到现在まで見たこともないほどきれいなヤ

ドカリの家を突然見つけた。最初にどれをつかめばいいか分からないほどたくさんあった。

ベンは急いでママレードの瓶を開けて、ヤドカリの家を一ずつ岩から取って、瓶がほとんどいっぱいになるまで詰めた。そして、太陽で温められた大きな岩にのぼって、宝物を見た。

驚いてもうちよつとで瓶を落としそうになった。その中ではヤドカリがいっぱい這い回っていた。小さな黒い足がじたばたして、せわしなく出口を探して、つるつるしたガラスをのぼって出ようとしていた。

初めは手を入れる勇気がなかったけど、近くから見ると群れからヤドカリの家の一つ取り出した。その家にはとてもちっちゃいヤドカリが入っていた。黒い足がベンの指にしがみつこうとするみたいにひっかいた。すばやくベンはヤドカリを瓶に投げ入れた。





感じた。
写真で充分だ。ただ見るだけで、ちっちゃくて黒い足が指をひっかいているのを
ありありと。

そして、ヤドカリが興奮して這い回り続けて
いる間、海のほうへ目を向けて長い間考えてい
た。ようやくベンは溜息をついて、ヤドカリを
見つけたところへ降りてもどった。注意してヤ
ドカリを海にふつてもどした。全部。

「二匹も持って帰らなかったの」と親友が
写真を見た時に聞いた。「二匹も？」

うん、いつも死んで、干からびた足を見る
気にならない」とベンは答えた。